

明日 への 話題

内は外で外は内



同志社大学大学院
ビジネス研究科 教授

はま のりこ
浜 矩子

資本が国境を越える時、資本主義はどこへ行くのだろうか。内と外との区別が判然としなくなる時、経済的均衡というものについて、一体、どのように考えればいいのだろうか。

資本主義的な再生産のプロセスは、基本的に国民国家という閉鎖経済体系の中で回ることが前提になっている。だからこそ、「日本の景気」とか、「アメリカの景気」という言い方が成り立つわけだ。ところが、いまや、資本を国民国家の中に封じ込めておくことは出来ない。カネはいとも簡単に国境を越えて移動する。

こうなると、次第に誰の行動が誰の景気を規定するのかも、判然としなくなっている。先進諸国がデフレ脱却を目指して金融大緩和を進めれば、それらの国々の国内で金利を稼げなくなった資金は、国境を越えて新興諸国になだれ込む。新興諸国がバブル回避を目指して金融を引き締めれば、それに伴う金利高が誘因となって、デフレの先進諸国からの資金流入が増幅される。カネを新興諸国に吸い取られる先進諸国においては、デフレは一向に解消しない。

こんな具合に資本の論理が働いてしまう世の中において、政策は一体どのように振舞えばいいのか。デフレの先進諸国は、資金流出を防ぐために金利を引き上げるのか。バブル化する新興諸国は、資金流入を防ぐために金利を引き下げるのか。

中国に進出した日本企業が生産を拡大する。それに伴って、日本から部品・資材等々が中国向けに出荷される。これは、言うまでもなく、日本の対中輸出増をもたらす。この種の輸出を「外需」と言うのか。これを中国の対日輸入が増えているという言い方で語っていいのか。グローバル・サプライ・チェーンの中に誰もがきめ細かく組み込まれている今日において、内需と外需の仕切り線を国境上に引くことに、果たして意味があるのか。

いまや、中国が世界の工場になったと言われる。だが、実はそれは違う。中国が世界の工場になったのではない。世界が中国を工場にしたのである。かつて、イギリスが世界の工場だと言われた時、イギリスで工場生産を行っていたのは、イギリス企業ばかりであった。今の中国で工場生産を行っている企業は、果たしてどこまで中国企業か。

「福は内、鬼は外」。それを誰しも願望する。だが、グローバル時代における内とはどこか。どこまで鬼を追いやれば、外に出て行ってもらったことになるのか。実に実に、新しい知恵を要する新しい時代。それが今だ。